

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.6 June 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
あなたの手は信仰者の手
／高見宇造..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (30)
ニューヨークの日系人と天理教伝道①
／尾上貴行..... 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (11)
侵略的日本語教育と国際交流のための日本語①
／大内泰夫..... 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (9)
異端ではなく破綻となる悲劇
—その宗教的混乱を超えて
／金子 昭..... 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (17)
初期仏教に見る「ことば」の諸相⑥
／成田道広..... 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (4)
1. ラテンアメリカ基礎知識の話
／清水直太郎..... 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (46)
思い出の金閣怒先生・置田雅昭先生
／桑原久男..... 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (27)
『TINTIN AU CONGO』(『タンタンのコンゴ探検』)
／森 洋明..... 8
- ・ ヴァチカン便り (38)
ノートルダム大聖堂の火事によせて
／山口英雄..... 9
- ・ 2019 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (5)
第 1 講：51「家の宝」
／高見宇造..... 10
- ・ 図書紹介 (112)
『ネパールの民話 チベットの商人他』
／堀内みどり..... 11
- ・ おやさと研究所ニュース..... 12
第 321 回研究報告会 (佐藤孝則)

巻頭言

あなたの手は信仰者の手

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

「令和」の新しい御代を迎え、研究所としても天理教学と伝道への貢献を通して世の安寧に努めて参りたいと、思いも新たにしている。ところで研究所の所長室には様々な来訪者がある。これは私が就任してからも変わらないが、『天理教事典 第三版』を刊行してからは、一般の来訪者に加えて特に天理教学を学びたいという若い世代の訪問が増えたように思われる。教内の皆さんがそうした思いを研究所に寄せて下さるのは有難いことだと思っている。

また一方では、私の研究テーマが「宗教社会福祉」であることを知っておられるのか、若い世代の福祉関係者の訪問もある。特に保育士や高齢者、障害者の福祉施設で介護福祉士として務める人たちである。これは質問と言うよりも相談の色合いが強い。「私は教会長子弟で後継者ですが、今は福祉職に就いています。信仰者としては、これで良いのでしょうか」、また「天理教では福祉の仕事はどのように考えるのですか」という相談がそのほとんどを占めている。いずれも所属教会との関係から生じる葛藤から話を聴いて欲しいというものである。自身としては戸惑うこともあるが、まずは訪ねて下さったことに感謝してお応えをしている。こうした問い掛けは天理教だけではない。私は以前、全国の仏教やキリスト教団の福祉担当者呼び掛け、天理で「宗教教団福祉担当者連絡会議」を催したことがある。その際も、参加者から同じ声を聞くことがあり、宗派を超えての問題だと感じた。

またこれは天理教でも古くて新しい問題である。昨年、研究所の「研究報告会」において「戦前の天理教農繁期季節託児所報告」を行い、戦前（昭和 11 年）、長野県在住の教会長が地域農村から請われてこの活動に取り組み、大きな成果と高い評価を得た事例を述べた。この教会長も信仰と託児事業の両立で葛藤を持つが、やがて「託児と信仰を両立させ

ようとしたから、悩みが湧いて来たので此の二つは決して別のものではない。大勢の子供たちを抱えていますから、朝夕のお勤めに致しまして、真に己を空しくして、子供達のために祈ることができず」と悟られている。これは今も通じる大切な気づきだと思った。

ところで私はこうした来訪者の相談に対しては、保育士であれば、「あなたが毎日、子供たちを抱き抱えるその手は信仰者の手ではありませんか?」、介護福祉士であれば、「あなたが毎日、食事の介護や排泄のお世話をするその手は信仰者の手ではありませんか?」と問い掛けている。するとほとんどの方は、ほっと安堵した顔になる。保育や介護の仕事が神の御用に転化することに気付く瞬間である。これは信仰の覚醒と言って良いのだろうか。「有り難うございます。また明日から頑張ります」とお帰りになる姿に、私自身が励まされている。

こうした問い掛けは以前、信仰上の悩みを抱えた方が、脳性マヒによる最重度の障害のある信者から、「あなたは教祖から 2 本の腕を戴いているんでしょと励まされました」というお話を聞いて考えたことである。葛藤のない専門職はありえない。まして対人援助の職に就く信仰者であればなおさらである。

私は学生時代、マックス・ウエーバーの著作を求めて読んだが、なかでも『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫・上巻、梶山力・大塚久雄訳、昭和 40 年 2 月 10 日発行)にある、「文化発展の『最後の人々』にとっては、次の言葉が真理となるであろう。『精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、かつて達せられたことのない人間性の段階にまですでに登りつめた、と自惚れるのだ』と。」(246 頁)の一節からは多くのことを考えさせられた。まずは私自身が「精神のない専門人」にならぬよう自戒しながら、これからも勤めたい。

ニューヨークの日系人と天理教伝道 ①

おやさと研究所講師
尾上 貴行 Takayuki Onoue

ニューヨークの日系人コミュニティ

戦後の天理教アメリカ伝道の特徴の一つとして中西部や東部への伸展があげられる。現在でも天理教の教勢は西海岸地域に集中しているが、東部においても天理教ニューヨーク・センターを中心として様々な活動が行われている。西海岸と同様、その伝道の歴史には日系移民の存在が小さくない。

戦前

日本人が最初にニューヨークを訪れたのかは定かではないが、1860年に日米修好条約批准のために江戸幕府の役人一行が訪れ、歓迎を受けたとされる。また1860年代後半には日本から留学する者も現れた。1872年に領事館が設置され、初代領事として富田鉄之助が着任した。当時ニューヨークに在住する日本人はわずかであったが、将来の日米貿易を見据えての設置であった。実際、1880年頃には貿易商が開業し、三井物産や横浜正金銀行の支店が設置されるなどの動きが見られた。そして日清戦争、日露戦争、またセントルイスで開催された博覧会などにより、アメリカ社会で日本の認知度が徐々に高まっていった。

1900年代に入ると邦字新聞社、様々な日系人組織や団体が形成されるようになった。1907年に日本人の相互扶助を目的として「日本人共済会」、1914年にはアメリカ東部の代表的な日系機関「ニューヨーク日本人会」が設立された。日系宗教界でも、1899年に「紐育日本基督教会」、1937年に「紐育仏教会」がそれぞれ設立されている。ニューヨーク総領事館の1939年の調査によれば、当時ニューヨーク州に在住する日本人は2,372人で、その主な職業は、会社員、学生、物品販売業、官公吏・軍人、旅館・料理店、家事被雇人などであった。調査の備考には「在住者数に於て調査漏相当数あらん、実数は之以上に上るべき見込、地着筆頭は家内労働の500名余にして農耕方面僅かに27名は当地域の事情の反映であろう。」(新日米新聞社編1961年、1336頁)と記されており、西海岸地域とは異なる当時の在住日本人たちの様子がうかがわれる。

戦時中及び終戦直後

満州事変以降日米関係は悪化し、ニューヨークにおいても反日感情が徐々に激しくなっていった。1941年にアメリカ政府が在米日本資産を凍結すると、ニューヨーク在住の日米貿易関係者は多大な打撃を受けることとなった。そして同年12月7日に日米が開戦すると、FBIによる日本人拘引が即日始まった。翌8日の夜までに、ニューヨークでは100名以上の日本人(主に日本政府関係者、日本商社の社員、日系コミュニティの有力者など)が逮捕された(新日米新聞社編1961年、1341頁)。

このように開戦と同時に拘引された人、また開戦直前に日本へ引き上げた人もいたため、ニューヨークの日系人人口は戦時中かなりの減少をみた。1940年頃には約3,000人であったが、1942年には推定1,750人となった。その内訳は日系一世1,100人、二世650人で(同上、1343頁)、当時西海岸地域では二世数が一世代を大きく上回っていたことからすると、ニューヨーク在住日系人の特徴の一端がうかがわれる。また西海岸の日系人には根こそぎの強制収容が実施されたが、ニューヨークでは行われなかった。日系キリスト教会の牧師や仏教会の開教

師なども、一時的に収容されたものはいたが、教会の多くは閉鎖されることなく礼拝が続けられ、牧師や開教師なども、管内の信者を訪ね慰問するなどの活動を行っていた。

連邦政府の日系人転住政策により、収容所から出所した日系人は、当初西海岸地域に戻ることが許されなかったこともあり、中西部や東部へ転住するものも多かった。1950年代には、ニューヨークへの在住者も増加し、日本クラブ、日本商工会議所、日系人会などの諸団体も再興されていった。アメリカ政府の国勢調査によると、1950年に3,893人であったニューヨーク州の日系人人口は、10年後の1960年には8,702人と倍増している。この背景には二世世代による日系人コミュニティ形成、日本商社の進出や「軍人花嫁」の渡米、また移民法改正による新移民の増加などがあつた。

現在

アジア・アメリカン・フェデレーションの2013年の調査報告では、ニューヨーク市在住の日系アメリカ人の人口は31,649人であり、そのうち57%はマンハッタン、23%はクィーンズ、17.5%はブルックリンに在住していた。同市の日系アメリカ人人口は、アジア系集団の中では7番目であり、在住者の一般的な傾向として、高学歴、高収入、低貧困率などがあげられる。また外務省の海外在留邦人数調査統計によれば、2016年10月1日現在、ニューヨーク都市圏の在留邦人数は46,917人であった。

現在ニューヨークに在住する日系人は、戦前に移住した一世やその子孫たちの歴史や活動を土台としてコミュニティを形成し、1960年以降のアジア系移民の増加、エスニック・リバイバルの動きともあいまって、様々な活動を活発化し、発展してきた。現在「ジャパントウン」の象徴として考えられるのはマンハッタンのイースト・ビレッジ地区西部であり、日系人経営によるレストランや商店も多く、マンハッタンの中でも最も日系人の多い地域のひとつである。しかし、ニューヨークに形成されている多様なエスニック・コミュニティの中で、日系人コミュニティは、チャイナタウンやコリアウエイのように自らの存在を主張しているように見え、存在感があるコミュニティと違い、表面的にはそれほどその存在を認識されていないように思われる。また「自分探し」のためや日本社会を逃れて渡米して来た日本人たちなどが日系人コミュニティから距離をおく傾向もみられる。その一方で彼らは、日本人協会や邦字新聞社などがあるミッドタウンや日系人居住者の多いフラッシングなどとネットワークとして繋がっている。また日本との繋がりを有したまま生活している日系人も多く、現在の日系人コミュニティは、ニューヨーク社会に拡散しながらも緩やかに結ばれたトランスナショナル的側面をもっていると考えられる。

【参考文献】

- 木村昌人「ニューヨークと日本人社会」柳田利夫編『アメリカの日系人：都市・社会・生活』同文館出版、1995年、87～116頁。
- 新日米新聞社編『米国日系人百年史—在米日系人発展人士録』新日米新聞社、1961年。
- 広田康生・藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ』ハーベスト社、2016年。

侵略的日本語教育と国際交流のための日本語 ①

日本語教育の歴史

日本語教育史は大きく分けて、次のように3期に分類されている(関正昭『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク、1997年、5頁)。

- ① 外国人主体の日本語学習・日本語研究の時代(19世紀末以前)
- ② 「侵略的」日本語普及教育の時代(19世紀末～1945年)
- ③ 国際交流のための日本語教育の時代(戦後～現代)

17世紀前半のキリスト教宣教師団の布教を目的とした日本語学習や、19世紀半ばから始まったヨーロッパの大学での日本語・日本研究などが、①に当たる時代である。その後、19世紀から覇権を目指した日本語普及政策で台湾、朝鮮、中国大陸などアジアの国々で日本語教育が行われた時代が、②の侵略的日本語普及教育の時代である。第2次世界大戦後、とくに1950年ごろからは学術・文化交流・経済協力のための日本語教育として行われ、現在に続いているのが③の時代である。

筆者は戦後生まれであるから、当然、③の時代しか実体験していないのだが、学生時代に経験したエピソードを紹介しながら、②と③の時期について考えるところを述べてみたい。

近くて遠い国

1983年、当時筆者は天理大学外国語学部朝鮮学科で韓国語を学んでいた。この年の春休み、同級生3人と韓国旅行の計画を立て、釜山、慶州、ソウルと回ってきた。気軽な気持ちで出かけた初めての韓国旅行であったが、自分の人生において大きなターニングポイントになった旅であったと感じている。釜山では、モントリオールオリンピック柔道の銅メダリストである趙在基先生が東亜大学校日語日文学科の学生を紹介してくださいました。趙先生は柔道で交流のあった天理大学へ留学されていた時期があり、その関係者からの紹介で筆者たち4人を受け入れてくださいました。当時は全斗煥大統領の時代で、大阪領事館へビザを取りに行かなければならず、パスポートだけで自由に旅行ができる時代でもなく、「近くて遠い国」とも言われていた。また韓国の人も、海外旅行が自由にできなかった時代でもある。

思い返せば、筆者が日本語教育の道に進んだルーツはここにあるのかとも思える。釜山では東亜大学校日語日文学科の学生たちが日本語でいろいろなところを案内してくれた。我々が韓国語を専攻しているということで、「我が国の言葉を勉強してくれてありがとう」ととても親切にしてくれた。また我々に会って日本に対する意識が変わったと言ってくれる者もいた。当時のエピソードには事欠かないが、なかでも「軍隊(自衛隊)にはもう行きましかか？」と問われた時に、筆者が「いいえ」と答えると「どこか体が悪いのか？」と返され、答えに窮したことがある。そもそも常識が違うことを肌で感じた。また、初めての異文化接触に戸惑うことも多々あった。直線距離では大阪から青森へ行くより近い釜山だが、外国に来ていることをあらためて感じることはばかりであった。東亜大学校の学生との交流から、自分たちがあまりに韓国のことを知らなさすぎると痛感した。

いま、筆者たち4人に会って、日本に対する意識が変わったと言われたと書いたが、韓国人の側でもまた、日本人と言えば

「怖い人たち、国を奪った悪い人たち」という教育を受けてきているのだと感じた。それが実際に日本の若者と会って日本語と韓国語で話し合ううちに、いろいろと認識が変わっていくことがあったようだ。彼らとの会話の中でお互いの国の教育が大きく影響していることも、後によくわかった。国語の教科書でも歴史の教科書でも日本に関するところにたくさんページが割かれ、反対に日本の教育では近代の歴史の中で韓国に関するものはわずか数行ばかり書かれているような状況であったから、認識の違いがたくさん起こることも無理はなかったのかもしれない。語学も含め、教育というものがどれだけ大切なものかを考えさせられる。

流暢な日本語

東亜大学校日語日文学科の学生たちと釜山のバスターミナルで涙のお別れをして、筆者たち4人は歴史文化都市である慶州へ向かった。慶州は日本の奈良・京都のような世界遺産に登録された遺跡もある

ところである。石窟庵、仏国寺などを回り、国立慶州博物館、天馬塚古墳へ行った時のエピソードだが、一人のおじいさんが流暢な日本語で話しかけて来た。韓国人が第二言語として習った日本語という感じではなかった。聞けば古墳を案内するから、帰りによかったら息子が



写真 慶州・天馬塚の前で(右端筆者)

やっている土産物店で何か買って行ってくればとのことで、案内を申し出てくださった。慶州に来る前に、釜山では同じ年代の日本語を勉強する韓国の大学生たちと交流していたが、彼らが話す日本語とは明らかに違うネイティブ話者のような日本語であった。

タイムマシンがあれば、その時に戻って案内してくれたおじいさんにどんな教科書でどのような授業の様子だったか、当時の日本語教育についていろいろ聞いてみたいとも思うが、今となってはどうしようもない。『日本語教育史研究序説』(19頁)では、「1905年に第二次日韓協約によって日本の保護国になり、翌年には統監府が設置された。教育制度が改編され、普通学校(小学校相当)、高等学校(中学校相当)で日本語教育が行われた」とあり、続いて「1910年に日韓併合がなされると『日語』は『国語』と改められ、植民地教育政策の根幹としての『国語教育』=朝鮮の国語としての日本語教育が強行された」とある。つまり外国語教育としての日本語ではなく、国語教育としての日本語を習っていたわけで、先のおじいさんはまさにその時代を経験してきたのだと思われる。

アドラーは啓示を受けたのか？

A・P・アドラー Adolph Peter Adler (1812-1869) は、キルケゴールより1歳年長にあたる牧師であり、彼とも親交があった。アドラーは当時の慣行に反して、デンマーク語で学位論文を書いたが、キルケゴールは彼に続いて同じく学位論文をデンマーク語で書いた。一方でアドラーはヘーゲル主義者であったが、他方キルケゴールは真っ向からヘーゲルには反対の立場だった。



A・P・アドラー
(1812～1869)

ところが、そのアドラーは、1843年に出版した説教集の中で、自分が直接イエス・キリストの啓示を受けたと驚くべきことを述べたのだ。イエスは彼に対し、ヘーゲル哲学に依拠するこれまでの著作を焼却し、聖書のみを拠り所とするように命じたと言う。この知らせを受けたデンマーク国教会当局は、彼が当時興奮して錯乱状態にあったと断定。翌年その牧

師職停止を命じ、翌々年には彼から牧師資格を剥奪した。

キルケゴールはこの事件に衝撃を受けた。アドラーは本当にキリストの啓示を受けたのか？ また、当局の罷免措置は正当なものだったのか？ 彼はアドラーが罷免後に刊行した著作を入手し、アドラーの真意を探るべく研究に没頭した。この研究はキルケゴール独自の心理学的考察によって掘り下げられている。彼は大部の原稿を書いたが、それを公にすることはアドラーを傷つけると考え、自ら出版することはなく、それらの原稿は遺稿として残された⁽¹⁾。

結論から言えば、キルケゴールの意見は一見守旧的とも受け取れるものである。すなわち、アドラーは啓示に関する主張を無条件に撤回すべきであったが、彼が撤回しなかった以上、精神錯乱状態にあったという理由で、当局が彼を罷免したのは全く正当なものだと見なしたのである。彼は、アドラー研究の副産物として、天才と使徒との質的相違を確信し、またキリスト教世界にあって真のキリスト者になるという課題を自覚した。アドラーの場合、これらのことが全く不分明なままであり、結局のところ宗教的混乱に陥っただけだったというのである。

宗教的混乱の帰結

アドラーの混乱ぶりは、当局の質問状に対する回答に端的に現れていると、キルケゴールは見た。すなわち、当初アドラーは自ら啓示 Aabenbaring であると主張していたものを、それが実は覚醒 Opvækkelse であり、さらに一種の靈感 Begejstring へとトーンダウンさせた。もしこれを終始一貫して啓示だと貫徹していれば、あるいはアドラーは「使徒」となったかもしれない。しかし、たとえ啓示であったとしても、そのことの承認を当局に求め、牧師職を続けるのは誤りである。他方それが実は靈感だったとするならば、もはや神は関係ない。その場合、自己自身に責任を負う「天才」として、彼は振る舞うべきだった。しかし、彼が後に書いた書物には啓示の影響もなく、天才の靈

感も反映されていない。これは要するに、アドラーは使徒としては偽者であり、天才としても中途半端な者だったことを示すものである。まさに宗教的混乱と言うほかはない。

キルケゴールは、このようにしてアドラーに対する手厳しい批判を展開したが、彼はこれを書物として出版せず、アドラーの名前を伏せた形で、その内容の一端をわずかに「天才と使徒の相違について」などに纏めて公にしたにとどめた。

アドラーの宗教的混乱から、我々はどのような教訓を汲み取ることができるのだろうか。彼はキリストの啓示を受けたと称したことにより、キリスト教の正統から外れてしまった。かといって、彼はその啓示を靈感へとトーンダウンさせたため、キリスト教の異端にもなれなかった。要するにアドラーは、正統でも異端でもなく、ただ単に宗教的に破綻をきたしたただけであった。

キルケゴールの議論の射程

しかし、キルケゴールは単に正統・異端のレベルで、アドラー事件を取り上げたわけではない。彼の議論の射程は、どこまでも宗教の真理へと肉薄することにあった。正統か異端かという問題設定では、そこまで辿りつくことができない。正統とは多数派が握り、異端とはそこから弾かれてきた少数派であるが、どちらも歴史的に成立したものに過ぎないからである。宗教の真理は、神と人間との間の弁証法な緊張関係の中でこそ問われるものである。そこで焦点になるのが、単独者として実存する人間の主体的なあり方である。

その意味で言えば、彼は、主体性に重きを置くアドラーの姿勢を実はひそかに買っていた。アドラーはたしかにヘーゲル主義者ではあったが、決してヘーゲルに心酔しているわけではなかった。そのことは、彼の学位論文「最も重要な形態における孤立した主体性」(1840)においてすでに窺うことができる⁽²⁾。彼は、この論文の中で、孤立した主体性を存在の単独性 Enkelthed と見なし、これをキリスト教と結びつけようと試みた。つまり、絶対的観念論(ヘーゲル)とキリスト教の実存思想(キルケゴール)との間に立つ思想を形成しようとしていたとも読めるのである。しかし両者の間には架橋できない深淵がある。彼の悲劇は、ヘーゲルに留まることができず、かといってキルケゴールへと突破できなかったところにあった。そして、彼はそのまま牧師になってしまい、結果として「啓示を受けた」という形でヘーゲルを破棄しようとした。しかし、それは宗教的な破綻であったと同時に、思想的な挫折でもあった。

宗教の真理は、哲学的に論証できるものではない。また歴史的に検証されるものでもなければ、科学的に確証されるものでもない。まして、投票による多数決で決まるものでは絶対にない。それは、ひたすら単独者としての主体的信仰のあり方に掛かっているのである。そして、そこには新しい啓示はもはや不要なのである。

[注]

- (1) 原佑・飯島宗享訳『アドラーの書』「キルケゴールの講話・遺稿集」第9巻、新地書房、1982年。
- (2) 大坪哲也編訳『キルケゴールとデンマークの哲学・神学』(晃洋書房、2018年)に所収。

初期仏教に見る「ことば」の諸相 ⑥

最後の「ことば」

布教の旅を続けた釈迦の晩年の様子は、『大般涅槃經』において克明に描写されている。この經典も原始仏典に属しており、その内容はかなり史実に近いとされている。永眠の地となったクシナガラにたどり着く前に、釈迦はパーヴァーという地で鍛冶工のチュンダという在家信徒のマンゴー林に留まっていた。そこでチュンダは釈迦に対し、布施としてキノコの料理（一説では豚肉）を差し出した。それを食べた釈迦は激しい腹痛をおこし重篤となった。自身の死を悟り、クシナガラにたどり着いた釈迦は、旅の最後を迎える準備をしつつ、弟子たちにもその覚悟を求めるかのように穏やかに語りかけたという。

「アーナンダよ。あるいは後にお前たちはこのように思うかもしれない、『教えを説かれた師はましまさぬ、もはやわれらの師はおられないのだ』と。しかしそのように見なしてはならない。お前たちのためにわたしが説いた教えとわたしの制した戒律とが、わたしの死後にお前たちの師となるのである。」（中村訳、2015：165）

釈迦は弟子らが不放逸に修行を続けることを最後まで求めていた。その後、釈迦はアーナンダの尋ねに応じて自身の葬儀に関して詳細に指示している。

「アーナンダよ。お前たちは修行完成者の遺骨の供養（崇拜）にかかずらうな。どうかお前たちは、正しい目的のために努力せよ。正しい目的を執行せよ。正しい目的に向って怠らず、勤め、専念しておれ。アーナンダよ。王族の賢者たち、バラモンの賢者たち、資産家の賢者たちで、修行完成者（如来）に対して浄らかな信をいだいている人々がいる。かれらが、修行完成者の遺骨の崇拜をなすであろう。（中略）アーナンダよ。世界を支配する帝王の遺体を、新しい布で包む。新しい布で包んでから、次に打ってほごされた綿で包む。打ってほごされた綿で包んでから、次に新しい布で包む。このようなしかたで、世界を支配する帝王の遺体を五百重に包んで、それから鉄の油槽の中に入れ、他の一つの鉄槽で覆い、あらゆる香料を含む薪の堆積をつくって、世界を支配する帝王の遺体を火葬に付する。そうして四つ辻（四つの道路の合一する地点）に、世界を支配する帝王のストゥーパ（仏塔、筆者注）をつくる。アーナンダよ。世界を支配する帝王の遺体に対しては、このように処理するのである。

アーナンダよ。世界を支配する帝王の遺体を処理するのと同じように、修行完成者の遺体を処理すべきである。四つ辻に、修行完成者のストゥーパをつくるべきである。誰であろうと、そこに花輪または香料または顔料をささげて礼拝し、また心を浄らかにして信ずる人々には、長いあいだ利益と幸せが起るであろう。」（中村訳、2015：140-142）

バラモンが火の儀礼を中心とする祭式中心主義を説き、それに対して釈迦は正しい行為と瞑想という実践主義を説いたので、弟子らには葬儀などの祭式に関わることを許さなかったと考えられる。上述の事細かな儀礼の指示にはいささか誇張もみられるが、遺体を新たな布で包み火葬することは現代のインドやネパールにおいても行われており、それほど特別なことではない。いずれにしても釈迦の指示に近い形で葬儀が行われたと考えられる。

出家者が葬儀などの一切の祭式に関与しない点は、初期仏教の伝

統と教えを忠実に守っている上座部において現代に至るまで受け継がれており、大乘仏教における葬送儀礼と異なっている点が注目される。

マッラ族の在家信徒らによって釈迦の亡骸は茶毘に付され、遺骨はリッチャヴィやヴァイシャリー、シャッキヤなど八つの種族に分骨されてそれぞれ塚に埋葬された。

2500年余りの時を経て、1898年北インド、ネパールとの国境近くのピプラハワでイギリス人考古学者ペツペが、ある古墳の発掘調査の際に蠟石壺を発見した。その壺の中には人骨と副葬品が取められており、外側上部には紀元前3世紀ごろのアショーク王の石柱碑文に近い特徴を示した言語と文字で碑文が刻まれていた。そこには「聖なるブツダのこの遺骨容器は釈迦族の兄弟姉妹と妻子が奉祀する」（筆者訳）とあった。さらに1971年にインド人考古学者シュリバスタブによって、同じ場所のより古い地層の発掘調査が行われ、新たに骨壺が発見された。ペツペ発掘の蠟石壺の碑文年代と釈迦の時代には隔たりがあり、碑文の翻訳と解釈にも研究者によって相違がみられ、どれが釈迦の遺骨なのか真偽を確定するには至っていない。いずれにせよ、それらは『大般涅槃經』の記述を裏付けるもので、史料価値も高い。カニシカ王やアショーク王など、仏教を保護した権力者の年代と発掘されたものの年代比較を手掛かりに、権力者による改葬の可能性も含めてこれまでの研究成果を再検討する必要があると思われる。

さて、分骨の後、埋葬された塚は次第に人々の崇拜対象となり、そこに仏塔が建立されるようになった。その結果、仏塔に対する崇拜形式が各地にひろまり、在家信徒の信仰活動の中核をなすようになった。そして遺骨の有無に関わらず、仏塔を建立し崇拜することで功徳を積む信仰が次第に芽生えていった。さらに、建立された仏塔を維持管理する人々が現れると、彼らは出家在家を問わず新たな宗教運動の嚮導者となった。釈迦の「ことば」は新しい仏教として次第に興隆し、伝統的な上座部仏教にはない教えが大乘仏教として展開していくことになった。

特にこの大乘仏教は紀元2世紀ごろから北インドからガンダーラ地方にひろまり、シルクロードを経て西域各地から東アジアに至った。その過程で釈迦の「ことば」は思想的変容を経た後、様々な經典として生まれかわり、諸言語へ翻訳されることとなった。

「さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう、『もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい』と。」（中村訳、2015：168）

この言葉を最後に釈迦はこの世を去った。出家者としての彼の人生は、旅に始まり旅に終わることとなった。「すべてのものは生じては滅び、それが静まる状態こそが涅槃の境地である」という彼の教えが、臨終に際する最後の言葉に収斂されている。

釈迦という一人の出家者の旅はクシナガラの地で終わりを告げた。しかし彼が残した数々の言葉は、後に「仏教」として変容しアジア各地に伝播した。「受容と変容」の新たな旅をはじめた彼の「ことば」は、次第に多くの人々の心のよりどころとなっていく。次回からはその過程に注目し、大乘仏典の翻訳に焦点を当てていくことにする。

[引用文献]

中村元訳『ブツダ最後の旅 大パリニッバーナ經』岩波書店、2015年 第49刷。

1. ラテンアメリカ基礎知識の話

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

1.4 言語について

ラテンアメリカ地域の特徴の一つに言語的多様性と特性がある。メキシコ以南、南極の手前までスペイン語が普及し、ブラジルはポルトガル語。その他、南米カリブ海岸側のガイアナ、スリナム、フランス領ガイアナ、カリブ諸国、アンティル諸島では英語、フランス語、オランダ語が公用語として使用されている。他のアジア、ヨーロッパと比べると、多様性といっても言語の上では驚くほど統一されている、というのが通説である。

ただ、歴史的に15・16世紀より、新大陸に到着したスペイン、ポルトガル、カリブ海にはその後、前述のオランダ、イギリス、フランスが入り、続いての奴隷制でアフリカ系の人が入植したり、アジア系の人たちが移民したり、そのような過程の影響が絡みあって、ラテンアメリカ地域の実社会に入ると言語的にはかなりの多様性が存在し、同じ言語でも各国によってかなり「温度差」(方言)が存在する。今回は、ラテンアメリカ地域のその少し異なる言語間の「温度」とは何かということに少し触れることにする。

*クレオール言語

ベネズエラに近いカリブ海の旧オランダ領の島々、ABC諸島(Aruba, Bonaire, Curaçaoの頭文字)では「パピアメント」という混成言語が話されている。パピアメントは「クレオール語」の一つとされている。「クレオール」とはスペイン語でクリオージョといい、スペイン人が15世紀末に新大陸に到着して以来、新大陸で生まれたスペイン人や白人のことを指すのが本来の意義である。そしてその言語とは、植民地時代、植民の言語と先住民の言葉が混ざり、つくられた言葉だそうである。

パピアメントの基幹となっている言語はポルトガル語であり、それに英語・スペイン語・オランダ語の要素が入っている。どんな言語か以前から実際にその地域に行き聞きたいと思っていた。その思いが叶い、2年ほど前キュラソーに行く機会があった。思惑通りパピアメントが話されている。しかし、わかりそうでわからない。単語は聞こえてくるというか何かしら拾えるのだが、文章の意味は取れない。「これがパピアメントか〜！」となぜか妙に感激した経験がある。

*先住民語

新大陸「発見」以前、先住民は独自の諸文明を築き、独自の言語を使用していた。現在でもその数は全体で約550言語あり、コロンビアでは、60言語、ペルーとメキシコで50言語、ボリビアで30言語、中米のパナマでさえ8言語が話されている。⁽¹⁾その代表はケチュア語系、グアラニー語系、アイマラ語系、コロンビアではチブチャ語系が多い。パラグアイはラテンアメリカ諸国で二つの公用語の国である。スペイン語とグアラニー語系が使われている。

このような先住民語がスペイン語に混ざり、各国独特な言葉や慣用表現などが存在している。地名などに顕著に現れている。図は、ラテンアメリカ地域での先住民言語数を示している。

*スペイン語化政策・スペイン語への統一

一方、20数カ国の公用語であるスペイン語もラテンアメリカ社会では方言がかなりある。だがその方言や言語の多様性の



図 Lenguas Indígenas en América Latina (ラテンアメリカにおける先住民言語) <http://cronicasinmal.blogspot.com/2018/07/lenguas-indigenas-en-america-latina.html> 「国ごとによる先住民言語の数 10, 50, 100」 「ユネセフによれば、ラテンアメリカにおける先住民言語 557 言語の約 5 分の 1 にあたる先住民語が絶滅の危機にさらされている」

所属する国語審議会のような国語政策組織で、この組織により、20 数カ国の公用語であるスペイン語が統制され、ラテンアメリカ諸国では、どこでも通じ、どこでも同じ表記の標準スペイン語が維持されているわけである。

このスペイン語化政策というのは、征服者が入植した時代からの政策である。前述の王立アカデミー会員であり、スペインの作家であるフェルナンド・ラッサロ氏は、征服者や聖職者が新大陸に到着して以来、ある困難に直面していたとし、その中で、「一つの地域の部族言語を習得しても、隣接する部族とのコミュニケーションには何の役にも立たなかった。先住民の中でスペイン語を仲介するものを養成するしかない。この事実は痛くコロンブスをがっかりさせた。(…) 当時の王室は、スペイン語教育には目もくれず、現地に重きを置き、当時の聖職者に先住民の言語を覚えるように指導した。しかしながら、征服作業や布教が困難である状況を踏まえ、先住民には自分達の言語の使用を禁止し、スペイン語を覚え使用する、という通知書がすでに 1595 年に作成されたのにもかかわらず、当時のスペイン国王フェリペ二世はその訓令には賛成せず署名しなかった。⁽²⁾」

このような「文化の支配」的目論見がなされていたわけである。同氏によれば、1796 年メキシコのフランシスコ・ロレンサーナ大司教がスペイン国王カルロス三世に宛てた、先住民言語が多く、「キリスト教布教」が難しいという内容の書簡により、国王は教師を選出しスペイン語教育に踏み切った。

皮肉にもそうしたスペイン語化政策は、後に「独立」の火種になるとは誰も予想しなかった。

[註]

(1) <https://www.google.co.jp/search?client=opera&q=lenguas+indigenas+en+América+Latina&sourceid=opera&ie=UTF-8&oe=UTF-8>

(2) Fernando Lazaro Carreter, *Curso de la Lengua Española*, Anaya, 1988

第30回天理考古学・民俗学談話会

天理大学歴史文化学科は、今春、従来の専攻制を改めて、研究コース制に移行した。これまでは学生募集・受験の段階から、歴史学専攻、考古学・民俗学専攻という形で分かれていたのが、これからは、歴史文化学科の学生としてまとめて入学し、2年次に進む段階で、歴史学研究コース、考古学・民俗学研究コースに分かれる形に制度が変わったのだ。広く歴史文化に関心のある学生に入学してもらい、1年次の段階では、歴史文化に関わる諸学問の基礎を幅広く学び、そのあとで各自の関心や適性に依じて分野を決定する「レイトスペシャライゼーション」の方向性は、大学入学時のミスマッチをより少なくするという点で、今の時代に即しているといえるだろう。

とはいえ、専門性を深めながら、同時に、幅広く知識や技術を身につける歴史文化学科の学びそのものがらりと変わったわけではなく、考古学・民俗学研究コースでも、従来どおり、考古学と民俗学に関する専門的な教育研究を実践的に進めていくことになる。今春も、考古学・民俗学研究コースでは、研究室の恒例行事として、授業開始まもなくの4月5日、新入生を歓迎するお花見会を開催し、連休を迎えた4月27日には、ふるさと会館を会場に、新旧の卒業生をまじえた考古学・民俗学談話会を開催した。毎年、この時期に開催される談話会では、



写真1 談話会の会場風景

卒業生や教員、ときには学生が、それぞれの研究成果や活動を紹介するのだが、第30回目となる今回は、例年と異なっ

て、この一年に逝去された金関恕先生、置田雅昭先生の学問の歩みを振り返る下記の特別プログラムとなった。

小田木治太郎「金関恕先生と東大寺山古墳の発掘調査」

山内紀嗣「置田雅昭先生と布留遺跡の調査研究」

桑原久男「金関恕先生と天理大学考古学・民俗学研究室」

小林善也「金関恕先生と下関市の考古学」

吉永史彦「置田雅昭先生と遺跡探査」

日野宏「金関・置田両先生とイスラエルの発掘調査」

小田木・山内両氏の報告では、天理大学にまだ歴史文化学科がなかった時代に、両先生が附属天理参考館の仕事として天理市内で行った発掘調査や出土資料の研究の内容が紹介された。考古学の分野で天理大学が全国的に有名なのは、天理参考館の充実したコレクションのほか、大学近辺の古墳や遺跡そのものが素晴らしい内容を持っていること、そして、参考館や大学に所属する研究者・学生が、そうした遺跡に対する先進的な調査研究を早くから進めてきたことによるのだ。

歴史文化学科と金関・置田両先生

平成4（1992）年の大学改組に際して、歴史文化学科の開設

に尽力されたのが他ならない金関先生だったが、先生が構想して発足した当初の考古学専攻は、考古学担当教員が4名、民俗学担当教員が2名という陣容だった。考古学は、最初の主任を務めた金関教授のほか、天理参考館から異動した置田教授、奈良国立文化財研究所から移籍してこられた山本忠尚教授、そして、大学院の博士後期課程を単位取得の形で終えたばかりの筆者が専任講師として加わった。新設された歴史文化学科、なかでも考古学専攻の人気は上々で、全国から多くの優秀な受験生が集まり、競争を突破した学生たちが、充実した教授陣と整った設備環境のもと、切磋琢磨して考古学の専門的な勉学に勤しんだ。今回の発表でとくに印象的だったのは、その歴史文化学科の考古学専攻で金関・置田両先生から教えを受け、現在は、専門を活かし、あるいは専門を離れ、社会の中堅として活躍している卒業生による発表だった。

下関市考古博物館に勤務する小林善也氏は、かつて金関先生が若い時代に携わった土井ヶ浜遺跡、梶栗浜遺跡、綾羅木・郷遺跡の調査を振り返り、金関先生が下関市に残されたものの大きさを紹介した。金関先生は、各遺跡の調査を通して人を育てられ、それが遺跡の保護につながり、現在の展開を導き、さらには、天理大学の卒業生が下関市で先生の志を受け継いでいるのだ。一方、現在は商社で管理職を務める吉永史彦氏は、学生時代は、置田雅昭先生の率いる「遺跡探査チーム」の一員として、西日本各地で合宿しながら遺跡のレーダ探査などを行った経験を紹介した。吉永氏が整理したように、歴史文化学科に職場を移してから置田先生は、遺跡探査が研究の一つの核となり、九州、とくに宮崎県における実験的な段階から、奈良県を含む近畿へと活動の舞台を移し、幅広い遺跡に調査対象を広げ、先生自身は、遺跡探査学会の中心メンバーとして遺跡探査の発展に貢献されたのだ。筆者の報告では、3月21日に天理市内で金関恕先生を偲ぶ会が開催されたこと、それに合わせて先生の追悼文集『春の日に』が刊行されたことなどを紹介した。金関先生、置田先生と言え、師弟関係にあり、年齢が離れ、人柄も大きく異なっていたが、今回の談話会を通して確認できたのは、お二人が、それぞれの持ち分を活かして考古学という学問分野に真摯に向き合い、人を育てられたということだった。

その後、本稿の執筆中、5月3日に元教授・山本忠尚先生（享年75歳）の訃報が伝わり、5日、6日に東大阪市内で執り行われたお別れ会に、各地から多くの卒業生が駆けつけた。歴史文化学科考古学・民俗学専攻の教育研究に多大な功績を残された3名の先生が、はからずも、この1年あまりの間に、次々と逝去されることとなり、沈痛の極みと言わざるを得ない。今は、先生方のご冥福を改めてお祈りしておきたい。



写真2 金関恕先生追悼文集『春の日に』

『TINTIN AU CONGO』（『タンタンのコンゴ探検』）

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

フランス語で書かれている漫画に「TINTIN」がある。作者はベルギーの漫画家エルジェ（Hergé：1907～1983）。彼が活躍した20世紀前半は、ヨーロッパがアフリカやアジアなどを植民地統治下においていた時代であり、この「TINTIN」では当時のヨーロッパから見た世界観を垣間見ることができる。

「TINTIN」はベルギーの新聞に連載される形で発表された。やがてシリーズ化され、最終的には24のシリーズとなった。記者である主人公のタンタンは、ヨーロッパだけでなく、中東、アジア、アメリカなど世界中に行く。ジャングルや砂漠、海底や宇宙とさまざまな場面で、奇想天外な筋書きで起こってくる事件や難題を解決する。これらの作品はベルギー本国やフランスだけでなく、英語をはじめ100以上の言語に翻訳され、日本語版もある。そして、このシリーズの2作目が『TINTIN AU CONGO』（1929年出版、邦訳名は『タンタンのコンゴ探検』）である。



筋書きは至って単純だ。タンタンがコンゴへ行き、サファリに出かけている途中で悪者に襲われるが、現地住民によって救われ、最終的にはアフリカ産のダイヤモンドを密輸しているギャングを捕まえるというものである。ただそのなかで、蛇や象に襲われそうになったり、崖から落ちてワニに食べられそうになったりと、ページをめくるごとに新たなストーリーが展開する。

この作品のなかで興味深いのは、その登場人物などの描き方である。当初は白黒で出されたが、カラー版になると真っ黒に描かれた現地黒人の身体がより鮮明に見える。黒色の顔には丸い目と大きな鼻、太いピンクの唇が描かれている。サファリの途中で出会う黒人は腰蓑だけを身につけ、槍を持って野生動物を追いかけられている。その姿はまさにステレオタイプの「アフリカ人」と言えるだろう。黒人では他にも呪術師や西洋風の衣装をまとった貴婦人が登場する。また、ライオンやサル、サイ、カバ、ヒョウ、キリン、バッファローとさまざまな動物が簡単に殺されていく。しかも同じ地域に生息しない動物が混在している。それはまさに当時の「アフリカ観」を表したものであったのではないだろうか。

コンゴ社会のこのような描き方が原因となり、この作品は人種差別や動物愛護の視点からしばしば問題視されてきた。タンタンが持って来た文明の利器に黒人が驚くところでは、スクリーンに写し出された映像を本物だと思って槍を投げる場面がある。他にも、熱病で苦しんでいる夫に悪い聖霊がついていると嘆く妻や、本来「Monsieur」のところを「missié」と訛った発音をする案内役も描かれている。黒人のフランス語に関しては、主語や冠詞、助詞を省いた台詞が目につく。実際2010年には、この『TINTIN AU CONGO』の販売差し止めや図書館からの撤去を求める民事訴訟があった。

そうした背景を踏まえて、日本語版（福音館書店、2011年）には編集部の名で以下のように但し書きがされている。

この本には、皆さんにぜひとも知っておいてほしい二つの問題が含まれています。

一つはコンゴの人々の描き方です。ここには当時のヨー

ロッパの人々がアフリカの人々に対して持っていた偏見が見られます。つまり、「無知」で「野蛮」で「迷信深い」アフリカの人々を、文明人である自分たちが指導し救ってやるのだという西洋中心の考え方です。（中略）今、この本を読んで、皆さんにこのような植民地時代の歴史的な背景をも考えていただけたらうれしく思います。

もう一つは、これも今では考えられないことですが、タンタンが動物たちを次々と銃で撃つシーンがあります。当時は、こんなことが一種のスポーツのように行われていたのです。野生動物の保護が叫ばれる以前のことで、自然界に対する人間の身勝手な行為の一つとして記憶されるべきだと思います。

確かにこの『TINTIN AU CONGO』という作品だけを「切り取って」見るなら、この作品には今日では受容できない黒人差別や動物虐待が描かれている。しかし、「TINTIN」シリーズのその他の作品においても、登場人物の多くは、いつも「間抜け」なのである。それは黒人に限られたものではなく、白人や黄色人、アラブ系や中南米の人たちなども、タンタン



にとっての敵味方とは関係なく、その間抜けな振る舞いで読者から笑いを引きだそうとしている。つまり、「TINTIN」の世界観はすべて「ずっこけ」であり、黒人の「無知」や「野蛮」だけがとくに強調されたものではないと言えるのではないだろうか。

とは言え、やはりそのなかには当時の実像が反映していることは否めない。奥地で伝道活動を行う白人神父、殺した象から象牙をとるタンタン。実際、この「TINTIN」シリーズでは、関連する歴史上の人物や出来事を想起させるようなスタイルが取り入れられている。そして何よりも、多くのアフリカの国のなかで特にこの「コンゴ」だけがタンタンの探検の対象となるところに、当時のベルギー社会を反映していると言えるだろう。白人神父に代わってタンタンが教室で教える場面では、初版は「Mes cher amis, dit-il, je vais vous parler aujourd'hui de votre Patrie : la Belgique.」（「皆さん、今日は皆さんの祖国ベルギーについて話をします。」）という



台詞だったが、1946年版からは算数の授業に変更されている。そうした意味において、「歴史的な背景をも考えていただけたら」ということに繋がっていくのだろう。

「タンタンが出向いた」コンゴはベルギー領で、現在のコンゴ民主共和国である。しかし、フランス領コンゴだった現在のコンゴ共和国でも、土産物屋では木彫りや銅板、針金などで作られたタンタングッズが売られている。店の人は冗談混じりで「タンタンはコンゴに来たんだ」と言う。もちろん商品を買ってもらうための「方便」だが、そこにはあの「TINTIN」シリーズに「選ばれた地域」としての自負のような空気が感じられた。

ノートルダム大聖堂の火事によせて

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

ノートルダム大聖堂の火事によせて

4月15日の夕刻、まだ日が残り明るい中、フランス・パリの中心部にあるシテ島のノートルダム大聖堂に火の手が上がり、大きな教会が炎に包まれてしまった。教会を象徴する尖塔は96メートル、重量は750トン、それが燃えて半分に折れて、崩れおちた。

大聖堂の工事は1163年に始まり、2世紀以上の月日を費やして完成した。時はバロック時代の始まりだった。大聖堂はパリのシンボルであり、フランス人の誇りでもあるが、世界からの旅行者、巡礼者で、いつも多くの人で溢れていた。年間の訪問客は1,200万人、エッフェル塔に次いで2番目になる。また、カソリック教会への訪問客の数では、ヴァチカンのサン・ピエトロ教会について2番目に多い。教会には計113のステンドグラス装飾の窓がある。教会の入り口の正面の円形バラ窓は、直径9.7メートルあり、他の二つの大きな円形バラ窓は、ゴシック後期の作品で、直径13メートルある。 Hammondオルガンは焼けずに助かったが、焼けた高さ96メートルの尖塔は、檜の木で作られており、それを鉛の板が覆っていた。これが火事の時の白い炎の元になったようだ。教会ではシンボリック儀式も行われ、例えば1804年にはナポレオンの戴冠式、ナチの支配からパリを解放する祈りも行われた。1945年には第2次世界大戦勝利を祝う式典会場となり、戦後はドゴール、ポンピドゥー、ミッテラン各大統領の国葬会場としても使われた。

ノートルダム大聖堂は、われわれのからだの一部でもあり、われわれの記憶の一部が燃えたのと同じようなものだと告白する者もいる。多くの人には涙を流しつつ、大聖堂の無事を祈った。多くの美術品が傷つくことなく、無事に運び出され、ルーブル博物館に運び込まれて、保存されることになった。

ローマ法王フランチェスコより、パリの大司教ミシェル・オーベティ氏に見舞状が送られた。「全フランス人の悲しみと同様に貴殿の悲しみに私も同じ思いです。皆の努力で再興できるでしょう。市の精神的中心であり、信仰の証として復元することでしょう。」

フランスの精神を癒し、信仰心を取り戻すため、ノートルダム大聖堂は再建に向けて、すぐに動き出した。復興・再建のための基金はすぐに集まり出し、また多くの大企業からも寄付金が寄せられた。フランス国としても、マクロン大統領は5年以内に復元すると宣言した。しかし専門家は、現代の技術、機械力を使っても復興には5年以上はかかると言っている。さらに復興は火災以前の元通りにするのか、また少しは変形するのかという問題が残っている。特に倒れた塔の部分をどうするのかというのは大きな問題である。出火の原因についても捜査が進められている。ノートルダム大聖堂は、ヴァチカンの聖ペテロ教会同様、テロの攻撃目標の一つに挙げられていた。2016年9月には、未然に防ぐことができたが、ISIS(イスラム国)の女性5人による自爆攻撃が計画されていた。しかし、現在はこの類の危険性はなくなっていた。それゆえに火災の原因は、屋根を修理するために必要だった電気回線による漏電だったのか、修理作業員の使用した火の不始末が原因だったのだろうか。

ノートルダム大聖堂の火事は、ローマの四大教会の一つ聖パオロ教会の大火事を思いおこさせる。聖パオロ教会は1823年7月15日の夜に、天井修理のために使っていた火の残り火の不始末によって火災が起きたのだ。焼け残ったのは、教会正面の一部、大アーチ、袖廊、

回廊のみだった。復元のための工事費の寄進を募ったところ、多額の金銭のみならず、エジプトの副王はアラバスター石を、ロシアのニコライ2世はクジャク石を寄贈してきた。修復、復旧工事には1世紀以上の時間がかかり、1928年に完成した。付け加えると、イグナティウス・デ・ロヨラはこの教会の「秘跡の礼拝堂」の前で、1541年にイエズス会を結成したのだ。

聖エジディオ共同体の創始者、アンドレア・リッカルディは、ノートルダム大聖堂の火災に寄せて、次のような談話を発表している。

「今回の火事には驚いた。しかし大聖堂は永遠のものではない。シンボリックだが、今日の火事は、フランスのみならず全世界の教会の脆弱性を表しているのだ。今日のノートルダムの一部の損壊は、もちろん、痛手である。しかし、悲しく大きな出来事であっても、キリストの信仰はモニュメントの貴重さに負うのではなく、人々の心に、信仰心に負うのである。火災中の多くの人の祈りを見たまえ。この姿は信者たちに多くの感銘と勇気を与え、信者でない人にも対しても感動の情を引き起こしたようだ。この出来事は、今年の復活祭の直前に起きたことである。キリストの復活の日の出来事を再確認する必要がある。最後の晩餐に集まった12使徒の面々でも、キリストが真に神の子であると信じていたのは、一体何人いたのだろうか。その12人の中にはキリストを売り払った使徒もいるのだ。結局キリストが逮捕されて、弟子たちもバラバラになってしまった。キリストは十字架上で処刑され、埋葬され、3日後に復活した。その復活したキリストに会うことによって、それまでの一連の出来事を信ずることができるようになり、彼らの信仰心も強固なものとなったのだ。弟子たちはキリストに見捨てられたのではなかった。それは信仰の黄昏を迎えたのではなく、信仰の黎明期の訪れである。つまり、神の信仰によって、未来を指向するものである。愛は死よりも強いものである。」

法王はローマ市役所を訪問

3月6日、法王はローマ市役所、ローマ市長を訪問した。2013年に法王に就任したフランチェスコにとっては初めての訪問だ。ローマ法王は全世界のカソリックの長であるが、また地元ローマの大司教でもあるのだ。それゆえにローマ教区官内の教会に司牧の使命として時折訪れている。法王は予定の15分前にローマ市役所に到着。ローマ市長ヴィルジリア・ラッジ女史は法王を出迎えた。市長は夫と息子を連れてきていた。法王は夫とも言葉を交わし、息子には祝福を与えていた。そして市長の執務室から望む世界一見晴らしが良いと言われる場所から、フォロ・ロマーノの遺跡、コロセウムの眺望を満喫し、20分ばかり市長室で歓談した。その時に用意された接待用の茶器、茶碗が写真に撮られ、新聞にも載ったのであるが、二つのお盆の上の鉄の土瓶、二つの普通のコーヒーカップ、砂糖、コーヒーと2枚のビスケットがあっただけである。法王を迎え、接待するのにこんなありきたりのものでいいのかと少し驚いた。

そのあと、法王は市議会ホールで150人ほどの市会議員、助役、市職員を前にして、ローマ市長の歓迎の辞を聞き、次に答礼として思うところを次のように述べた。「ローマはその誕生から開かれた街だ。2800年の長きにわたって、来るものは拒まず、すべて受け入れてきた。イタリア国内のみならずヨーロッパ各地に道を作り、各地との交流の輪を広げてきた。ローマは壁を作らず、人と人をつなぐ橋を築いてきたのである。今でも世界の人を迎え入れ、共存共榮するように導いているのである。」

第1講：51 「家の宝」

今回の公開教学講座では、以下の逸話を取り上げた。

明治十年六、七月頃（陰暦五月）のある日のこと。村田^{にわ}イエが、いつものように教祖のお側でお仕えしていると、俄かに、教祖が、「オイエはん、これ縫うて仕立てておくれ。」と、仰せられ、甚平に裁った赤い布をお出しになった。イエは、「妙やなあ。神様、縫うて、と仰っしゃる。」と思ひながら、直ぐ縫い上げたら、教祖は、早速それをお召しになった。ちょうどその日の夕方、亀松は、腕が痛んで痛んで困るので、お屋敷へ詣って来ようと思つて、帰つて来た。教祖は、それをお聞きになつて、「そうかや。」と、仰せられ、早速寢床へお入りになり、しばらくして、寢床の上にジツとお坐りになり、「亀松が、腕痛いと言っているのやったら、ここへ連れておいで。」と、仰せになった。それで、亀松を、御前へ連れて行くと、「さあ〜これは使い切れにするのやないで。家の宝やで。いつでも、さあという時は、これを着て願うねで。」と、仰せになり、お召しになっていた赤衣をお脱ぎになつて、直き直き、亀松にお着せ下され、「これを着て、早くかんろだいへ行て、あしきはらひたすけたまへ いちれつすますかんろだいのおつとめをしておいで。」と、仰せられた。（51「家の宝」）

*

この逸話は様々な視点から味わうことが出来るが、亀松は赤衣を通して教祖からたすけて頂かれたので、特に「赤衣」に焦点を当て報告をした。「赤衣」については、『教祖伝』第六章（122頁）にも「（明治7年）十二月二十六日（陰暦十一月十八日）、教祖は、初めて赤衣を召された。……これからは常に赤衣を召され、そのお召下ろしを証拠守りとして、弘く人々に渡された。これは、一名一名に授けられるお守りで、これを身につけていると、親神は、どのような悪難をも祓うて、大難は小難、小難は無難と守護される。」とあり、現在のお守りの理に繋がっている。

*

筆者は先ず、「おさしづと赤衣」について、その割書きを紹介した。22件のおさしづに「赤衣」という言葉が出て来る。割書きには「赤衣」が2カ所、「赤衣物」が2カ所ある。さらにおさしづ本文には「赤衣」が24カ所、「赤き着物」が1カ所あり、それは次の5つの話題に分類された。

「お守りに関するもの」、「女鳴物に関するもの」、「本席に関するもの」、「おたすけに関するもの」、「赤衣の祀り方」である。私が特に注目したのは「おたすけに関するもの」である。

例えば増井りん先生について、「りん以前教祖より赤衣頂き御座りますのをおたすけの時着ます事ありますか」の伺いには、

「……いつというその理は赤衣召し、心にちゃんと肌にかけて、これはそれ〜型もある〜。」（33・12・4）とあり、おたすけには赤衣を着るようにと言われている。

*

ところで今回は別紙資料として、山本欣旦氏（天理教校職員）の論文である「赤衣拝戴の史実について」（『天研』第15号、平成25年3月）を引用し、教祖が赤衣をお下げになった様子を

を報告した。そのなか「赤衣とおたすけ」について次のお話が紹介されている。

- ①「村上幸三郎。明治14年頃、教祖よりそれまで着ておられた赤衣をお下げ下された。幸三郎は教祖から赤衣を戴いてからは、赤衣を病人の枕元に置いてお願いされた。数々の不思議な御守護を見せられた。明治14年8月真誠組講元となる。泉東分教会初代。」
- ②「仲田儀三郎。『逸話篇』「136 さあ、これを持って」で、儀三郎に「さあ、これを持っておたすけに行きなされ。どんな病人も救かるで。」と、お言葉を下さされている。儀三郎は「この赤衣を風呂敷に包んで、身体にしっかりと巻き付け、おたすけに東奔西走させて頂いた。……その赤衣で病人の患うているところを擦ると、どんな重病人も、忽ちにして御守護を頂いた。」とある。ここで「これを持っておたすけ行きなされ。」と「赤衣の襦袢」を拝戴している。

*

先人は戴いた赤衣をおたすけに使われている。現在、その意

味合いはお守りに引き継がれていると思うが、筆者が会長を勤める和爾分教会も教祖から赤衣を頂戴している。平素は教祖のお社の横に桐の箱に入れてお祀りしているが、先日、先人に倣い「憩の家」病院に入院する知人のおたす



和爾分教会の教祖赤衣

けに初めて使わせて頂いた。この方は緩和ケア医療を受ける予定で、身体の上に赤衣を掛けて、おさづけのお取り次ぎさせて頂いたことを受講者に報告した。

筆者は本誌2018年12月号の巻頭言で「緩和ケアと赤衣」を書いた。それは「緩和ケア」は英語で palliative care と呼ぶが、その語源は後期ラテン語の pallium（外出着、外套を着た者）であることに触れた。palliative care は痛みを和らげる意であるが、自らが着ている上着を脱いで病者に掛ける行為を意味していた。この象徴的な行為を私たちの信仰に当てはめると、それは教祖が赤衣を病者に掛けられた姿に読み替えることができるのではないかと考えたのである。そんな考えから知人のおたすけに赤衣を使わせて頂いたことをお伝えした。「憩の家」では緩和ケアに取り組まれているが、その信仰的な象徴として赤衣を考えることはいかがだろうかと話して報告を終えた。なお当日は和爾分教会の赤衣を受講者に見ていただくことも嬉しいことであった。

『ネパールの民話 チベットの商人他』

(ラム・ビクラム・シザパティ著、小尾二郎、明石六郎、マシュー・アイナン訳、Ratna Pustak Bhandar (Kathmandu)、2018年)

おやさと研究所教授

堀内みどり Midori Horiuchi

本書は、ラム・ビクラム・シザパティ (Ram Bikram Sijapati) 氏によって集められたネパールの民話・伝説を NGO びしゅわ (ネパール語で「世界」という意味) のメンバーが日本語に翻訳出版したものである。原題は Nepali Lokkayha Sangalo で、

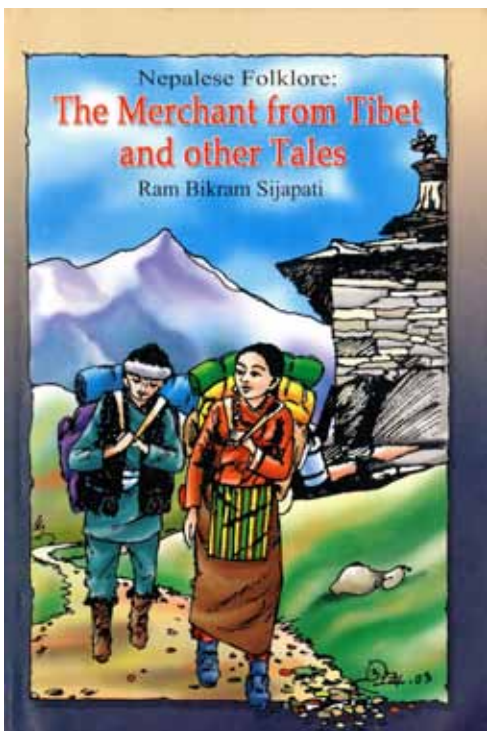


出版元であるラトナ書店のラトナ民俗シリーズの第13巻にあたる。ネパール語初版は1980年に出版され、訳者の一人であるマシュー・アイナン氏は英語への翻訳も試みている。

本書は、アイナン氏にとってラトナ書店から出版する2冊目の本であり、アイナン氏がネ

パールで展開する NGO びしゅわ及びラトナ書店との共同出版の形をとっている。売り上げは2015年に発生したネパール大地震の復興支援に用いられ、主に、ネパールの子どもたちへの教育支援に寄付されている。現地の NGO 「オーキッド・ネパール ORCHID Nepal」と共同で活動し、寄付金の子どもたちの教育のために生かされていることが確認できる仕組みができています。

本書のアイナン氏による英語版も同時に出版されており、天



理大学時代の同僚であるジョージ・マノ先生の協力を得ている。

さて表題になっている「チベットの商人」は、ネパールに商売に来るチベットの商人ニマとその友人ラレ、そして双方の家族を巡る話である。商売熱心なニマは年に数回正直者のラレの家に泊まって商売をしてい

た。あるとき、ニマがラレの家に来たとき、ラレは商売に出かけ留守にしていた。留守宅には妊娠中のラレの妻がいた。妻はニマに外の小屋で寝てくれるように頼んだ。出産後の6日目、子どもの運命を決めにチャイティ・デビ (女神) がラレの家を訪れる。ところが、外にある小屋に泊まっていたニマは母屋の戸の前で寝ていたため、デビは中に入れない。ニマはどんな運命をラレの子ども (息子) に与えたのかを教えてもらう代わりにデビが家の中に入れるようにした。そして、ニマに授かった娘は、ラレの息子と結婚し、将来的にはラレの息子が双方の財産を受け継ぐことになっているというのだ。ニマが一生懸命に働いて築いた財産は、前生における「負債」によってラレが受け取るべきものであるのだという。因果は巡るというような解釈もできようが、ここでは、デビが定めた運命は、たとえ、そのことを (ニマのように) 事前に知ったとしても、改変不可能だということが強調される。

子を授かること、財産をなすこと、強欲がもたらすもの、チャイティ・デビが決めた運命は変えられないこと、強欲な王妃たちと独りの良い王妃、兄弟とその嫁たち、王位継承など民話の扱う話題やその筋立ては分かりやすい。鳥などの会話が解せるなど、善人には特別な特徴が備わっていることも多い。日本の民話との共通も見いだせるかもしれないが、ネパールの文化を知っているとストンと納得する話もある。似たような話題でも展開が異なったり、教訓がなかったりするところがあるが、教訓があっても、日本の民話・説話とは違う目的が見られるようにも思う。たとえば、チャイティ・デビが決めた運命は、まさに宿命であるので、必ず実現することになっている。神様と人間がしばしば対等のように会話しているのも面白い。本書で取り上げられている民話は15話で、以下にその題目を記す。

1. 強欲な姉
2. 汁の身を食べに行ったナウリは汁に沈んで死んだ
3. 本当の話は口に苦し
4. 6人の兄嫁
5. カランの実の女王
6. 幸運を支えにする人
7. 6日目の運命
8. 7番目の妻の作戦
9. チベットの商人
10. 笑うパン、しゃべるスパリ
11. ニダリ、運命の時だ
12. 空と地面を繋ぐ牙を持つ鬼
13. 弟カボチャの奇跡
14. 金の靴
15. フラウラが落ちてくる木

購入希望者は、NGO「びしゅわ」に連絡してください。

事務所・連絡先

577-0035 東大阪市御厨中1-18-38

E-mail: ngobishwa02@gmail.com

<http://www5.kcn.ne.jp/~jkobi/BishwaHP.html>

佐藤孝則

1. 「緑の回廊」づくりのさまざまな実践例

(1) 林野庁が提唱する「緑の回廊」

林野庁が進める「緑の回廊」の目的は、分断された動物の保全と遺伝的多様性の確保のためにふさわしい森林を適切に維持することである。方法としては、森林整備の必要がある場合には植生に応じて下層植生を発達させたり、裸地化の抑制を図り、「緑の回廊」全体を針葉樹や広葉樹に極端に偏らない樹種構成、林齢、樹冠層等の多様化を図るための森林施業を実施することとしている。森林生態系の構成者である野生動物の移動経路を確保し、生息地の拡大と相互交流を促すことが多様性の保全において必要とされている。

そこで、原始的な天然林や貴重な野生動植物の生息・生育地等を保全・管理するため、保護林を設定し、それらを相互に連結して「緑の回廊」とし、野生動植物の移動経路を確保するための効果的な森林生態系の保全を図っている。

(2) 京大がアフリカで進める「緑の回廊」

西アフリカにギニア、リベリア、コートジボアールの3国の国境に囲まれたニンバ山（標高1,720m）がある。1993年、京都大学の研究チームが野生チンパンジーを調査した時、この地域で4～5群を確認したが、その後密猟などで激減したという。ちなみにこの山は、ユネスコの世界自然遺産に指定されている。

ニンバ山に生息するグループとは別の個体群が、西へ4km離れたギニア共和国のボッソウ地域で生活を続けている。この生息地は、今では周囲が畑とサバンナに囲まれ、孤立した状態になっている。そして現在は、1群9人（現在、チンパンジーを人間のように「人」として数える傾向にある）しか確認されておらず、密猟や近親交配の危険性が非常に高まってきている。そこで、1997年、京大チームはボッソウとニンバをつなぐ「緑の回廊（GREEN CORRIDOR）」プロジェクトを立ち上げ、4km間の植林活動やプロジェクトに関する一般への教育普及活動をおこない、現在もその活動を続けている。

(3) NPO 法人 ボルネオ保全トラストジャパンの「緑の回廊」

ボルネオ島北東部には、ボルネオゾウ、ボルネオオランウータン、テングザル、ギボンなど貴重な野生動物が多数生息する。NPO 法人 ボルネオ保全トラストジャパンは、「緑の回廊」として10カ所の保護区といくつかの保存林を選定し、野生動物たちの保護・保全活動をはじめた。

保護・保全活動の対象となった地域は、1990年代からアブラヤシのプランテーション開発が急速に進んだところで、彼ら

の生息地や保護区が分断化されている。そのため、野生動物の生息地や個体数は減少し、遺伝子の多様性も失われている。この活動に対し、ヤシノミ洗剤を製造・販売する日本の企業は、このプロジェクトに対し支援を続けている。

(4) 仙台市が進める「緑の回廊」

仙台市は、市のホームページの中で、「百年の杜づくり」について以下のように記している。「仙台市は、『杜の都』の名にふさわしい豊かな緑に恵まれた街で、市街地に残された緑地と奥羽山麓に至る広大な自然緑地をあわせると市域面積の約6割が緑に覆われています。しかし、市民生活に潤いを与えているこれらの緑も、都市化の進展とともに徐々に失われつつあり、これまで育てきた『杜の都』を未来に継承することが求められています。」「『百年の杜づくり』は、仙台の個性といえる『杜の都』の伝統に地球環境への配慮という新たな視点を加え、市民・事業者・行政の協働により、これからの100年で再生し、新しい『杜の都』を創造していこうとする取り組み」だとして、仙台市は市街地の「緑の回廊」づくりを着実に推し進めている。

2. 天理市における「緑の回廊」づくりの可能性

(1) 「緑の回廊」づくりの基本

天理市および周辺域の市街地には、社寺林を除くと、まとまった林地と判断される場所は少ない。住宅地や学校、児童公園、天理教の詰所などには樹木は見出されるが、本数は少なく、緑地帯の体をなしていない。一方、市街地の東に位置する青垣山麓には林地が広がり、まさに“青垣”となっている。この青垣山麓と市街地との間に緑の回廊が造成されると、“緑の潤いのある街”が形成され、緑地帯が防災林・防火林として機能する。このように、「緑の回廊」づくりは、市街地と山麓をつなぎ、防災効果を高める役割を担うと考えた。

(2) 可能性が高い「緑の回廊」づくり

天理市内の和爾下神社、伊射奈岐神社、都祁山口神社の三つの古い神社の社叢林を調べた結果、コジイ、ヒノキ、アラカシが基本樹種であることがわかった。これによって、「緑の回廊」づくりには、これらの「潜在自然植生」を基本樹種とすることが望ましいことが示された。さらに、「山の辺の道」沿いのアカマツやテダマツの種子をニホンリスが食べていることから、マツ類も植栽することが望ましいとも考えられた。とくにニホンリスは、小動物とのふれあいを醸し出すイメージ・キャラクターとして最適ではないかと考えた。

いずれにおいても、豊かな「緑の回廊」には「森林浴」や「緑陰効果」が期待され、それが「緑の回廊」の醍醐味になるのではないかと考えた。そのためには、地域住民、事業者、学校関係者、市職員などが協働して「緑の回廊」づくりに取り組むことが、最善の方策だと考えた。

グローバル天理

第 20 巻 第 6 号（通巻 234 号）

2019 年（令和元年）6 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 高見宇造

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan